

## 文末形式に見る女子高校生の会話管理

小林 美恵子

### 1. はじめに

小論では「事例研究・女子高校生の雑談」（『ことば』15号、以下「小林（1994）」と略す）に引き続き、同一の資料によって、高校生のいわゆる「おしゃべり」について分析考察する。資料として用いたのは東京都多摩地区の都立高校1年生6人の女性の、昼食時の雑談、約16分423発話を録音・文字化したものである。以下に資料の一部を抜粋紹介する。

- 
- 001M もう きょう 帰ったら お箸の特訓だよ。  
002T ちょっと 誤解してた。／あの人のこと。 /…倒置文  
003S んー どんなふうに？  
004T ただの 登校拒否野郎かと 思ってた。  
005M ナイスな 箸箱でしょ。／これ。  
006T なに？／これー。  
007M これしか なかったの。／うちに。  
008S 渋い。  
009M これしか なかったの。／うちにー。  
010T かっこいいよ。／それー。  
011M もうねえ ゆったっけー きのう 家にねー 帰るなり おかあさんに 箸箸とか いって。  
012M (笑)  
013M おこってんの。  
014T おこったの？／きのう\*\*\*だって。 \*\*\*…不明

015M おかあさんに あたし こどもの ときにねー。

016T うん。

017M 箸の使い方 教えなかったとか いって おこったの。

(数字の後のアルファベットは話者を表す。下線部については後述する)

---

小林(1994)では、この資料について、(1)話題の転換がどのように行われ、談話がどのように進行するか、(2)前の話者の発話がどのような様相で次の話者に受け継がれるのか(または受け継がれないのか)について分析し、おおよそ次のような結果を得た。

(1) 話題の転換について

- ① 現在進行している話題とは無関係に自分の興味に従ってなされる話題の転換が多い。すなわち「話題の飛躍」が多い。
- ② 一つの話者から他の話者へと転換したあと、再び前の話題が持ち出される、いわゆる「話の蒸し返し」が多い。さらにこれが何回かにわたって繰り返される例も見られた。しかもある特定の話題については特定の参加者が繰り返し提起する傾向が見られる。すなわち他者の提起した話題に参加し、発展させていくというよりは、自分の話したいことに折りあえば話題を引き戻そうとする意識があるのではないかと考えられる。

(2) 受け手発話の様相

- ① 他者が現在の話題に関係のない話題を提起した場合、これを無視して、それ以前の話題を続ける例が見られる。
- ② 他者の発話を受けてその立場で同情・共感するよりも、関連した自分のことを話す傾向がある。
- ③ 自分の提起した話題が他者に無視されてもこだわらず、他者の発話に答える例が多い。
- ④ あいづちがきわめて多い話者がいる。
- ⑤ 相手の言葉を繰り返して共感を示す発話が多い話者がいる。

以上は、対照資料として用いた職場での成人女性の談話(現代日本語研

1994)にはほとんど見られなかった、高校生の談話に特徴的な傾向である。これを見ると、(2) ③④⑤が他者の発話への関心や反応を示してはいるものの、それ以外は話者の関心が、他者の提起した進行中の話題よりも、自分が提起したい話題内容のほうに強くあることを示しているといつてよいだろう。極端に言えば、互いに自分の言いたいことだけを言い、他者の話はあまり聞かないというおしゃべりであり、特に目的のない雑談とはいえ、このようなものがどうして談話として成立し得るのか、などという疑問もわく。

しかし、現実にはきわめて親密な雰囲気の中で、彼女たちの談話は進行しており、昼食を取りながら軽い話題を楽しむというこの場の目的は十分に果たされている。論理ではなく、場をともにしているという親密・共感の意識によって、話題が展開していくのであり、あいづちや繰り返しの多用などはそれを支える技術の一つとして考えることができると小林(1994)では結論した。小論ではさらに文末の形式に着目し、特に「対人関係を構成する」(メイナード1993)とされる終助詞などの発現の様相から、親密・共感を支えるストラテジーについて考えてみたい。

## 2. 文末形式の現れかた

表は資料に現れた文末の形式を分類整理し、首都圏(うち2人は多摩地区)で職業を持つ成人女性の資料と対照したものである。

成人女性の資料として用いたのは、小林(1994)と同じく

- 40代編集者が職場の休憩時間に複数の男女同僚と行った談話 [H A]
- 30代高校教員が始業前に2人の男性同僚と行った談話 [H I]

それに、

• 40代市役所職員が昼食をとりながら複数の男女同僚と行った談話 [S H]  
のいずれも約10分の談話のうちから抽出したインフォーマント女性の発話 ([H A] 83 [H I] 108 [S H] 182 合計 373) である。これらはいずれも現代日本語研究会の共同研究「職場における女性の話しことば」(現代日本語研1994)で採録・文字化したものである。

[表] 高校生の雑談における文末表現の形式

分類	文末の形式	高校生	HA	HI	SH	成人計
I   (1) 平叙・言い切り	体言・形容動词语幹	11	4	7	9	20
	体言+「だ」	1	6	0	1	7
	用言(スル・シナイ)	43	10	13	6	29
	用言(シタ・シナカッタ)	12	2	4	4	10
	用言+助動詞 (ダロウ・ヨウ・ソウ 等)	2	1	1	1	3
	合 計	69 16.3%	23 27.7%	25 23.1%	21 11.5%	69 18.5%
I   (2) 平叙・終助詞その他付加	～(な)の	28	4	3	1	8
	～(ん)だよ	40	4	1	6	11
	～(ん)だね	22	4	2	12	18
	～のよ	0	0	1	0	1
	～のね	3	0	0	1	1
	～(ん)だよね	30	5	1	5	11
	～(ん)だな	5	1	0	2	3
	～のに	1	0	0	0	0
	～(のに)さ	1	1	0	0	1
	～か	4	1	0	1	2
	～(んだ)もの(ん)	7	0	0	1	1
	～もんな	0	1	0	0	1
	～んだ	3	0	4	0	4
	～(っ)て(ば)	5	3	0	0	3
	連用形+て	16	1	3	2	6
	～(ん)だけど	9	2	4	0	6
	～(ん)だから	3	3	3	3	9
～とか	1	0	0	0	0	
～じゃん	6	0	0	0	0	
です・ます(+終)	0	4	10	5	19	
合 計	184 43.5%	34 41.0%	32 29.6%	39 21.4%	105 28.2%	

分類	文末の形式	高校生	HA	HI	SH	成人計
II 疑 問	体言・用言(た)?	8	1	3	22	26
	疑問詞?	10	0	0	6	6
	～(な)の?	16	0	2	9	11
	～か(い/な)?	3	3	2	2	7
	～っけ?	1	0	0	0	0
	～かしら(ね)?	0	0	1	1	2
	～じゃない?	6	4	0	4	8
	～じゃなくて?	1	0	0	0	0
	～て?	0	0	1	0	1
	-----	-----	-----	-----	-----	-----
問	～でしょ(う)?	5	0	1	3	4
	です・ます(か)?	0	0	2	3	5
	合 計	50 11.8%	8 9.6%	12 11.1%	50 27.5%	70 18.8%
III	命令・依頼・禁止・ 勧誘	6 1.4%	0 0.0%	7 6.5%	0 0.0%	7 1.9%
IV	間投詞・応答詞・あい づち・(笑い)	84 19.9%	5 6.0%	16 14.8%	45 24.7%	66 17.7%
V	中断(含言いさし・ 言いよどみ)	26 6.1%	13 15.7%	11 10.2%	23 12.6%	47 12.6%
VI	その他(不明・挨拶語)	4 0.9%	0 0.0%	5 4.6%	4 2.2%	9 2.4%
	合 計	423 100.0%	83 100.0%	108 100.0%	182 100.0%	373 100.0%

表より高校生の文末表現の形式としては、「平叙・言いきり」形式が比較的少なく、終助詞その他が付加したいわゆる話しことばに特徴的な文型が圧倒的に多いことがわかる。次にそれぞれの形式について簡単に述べる。

#### I-(1) 「平叙・言い切り」形式

「平叙・言い切り」形式とは 前掲資料 002、004、008（下線部）のような例である。

メイナード（1993）では、用言の終止形（現在形・過去形）が他の要素を伴わずそのまま文末表現になったケースを「裸のダ体」と名付け、日本人20組計60分の日常会話を分析して、「裸のダ体」が相手を意識して相手に受け入れられ易いように形成されたものではないこと、日常会話の中でのその頻度は極度に少ないということを指摘している。小論ではこの「裸のダ体」に加えて、体言や形容動詞の語幹のみで言い切っているもの、体言に断定の「だ」をつけて、言い切っているもの、さらに用言に「だろう」「そうだ」「ようだ」「れる・られる」など事柄に対する話者の判断のみを示す助動詞の付加したものを含め考えた。これらは特定の対者を想定しない文章語であれば文末形式の中心をなすものであり、特に対者との関係や、相手に対する配慮なしに、話者の判断のみを示すものと言える。もちろん、これらはこのような表現を使っても問題のない相手に対してのみ用いられるのであり、その意味ではまったく対者を意識しないというわけではない。

#### I-(2) 「平叙・終止形その他付加」形式

「平叙・言い切り」文型に、終助詞「の」「ね」「よ」「な」「さ」「もの」などを付加すると一般的な話しことばの文型になる。前掲資料の001、007、010（二重下線部）のような例である。すなわちこの終助詞部分によって話者が相手に対して、どのように判断を提示しているかの態度を表すわけである。このような働きをするのは終助詞ばかりではない。高校生の資料に見られたものとしては、メイナード（1993）が「話

者の発話態度を示し、ひいては聞き手との対人関係に影響を及ぼす要素が含まれている」とする「～んだ」、「発話の終わりに余韻を残し、相手に自分の見方や考え方を押しつけないようにするストラテジー」としての「～て」形、同じく効果を持つと思われる「～けど」「～から」「～とか」など接続助詞がついたものがここに分類される。また高校生には疑問形である「でしょ(う)?」以外には1例もなかったが、対話敬語としての「です」「ます」やその活用形を含むものなどもここに分類した。表に見るとおり、高校生では、この形式が成人の[H A]と並んできわめて多い。ことに終助詞「ね」「よね」「よ」「の」などはどの成人と比較しても明らかに高率で現れているし、「～もの・もん」「～じゃん」「～て」などにも同じことがいえる。これらは高校生の一つの特徴的な傾向と言ってもよいだろう。「ね」「よね」「よ」「の」については後に詳しく述べる。

## II 疑問形式

疑問形式については、話題や、対照資料の成人の場合には談話参加者の中でどのような位置を占めるかによっても使用傾向に違いがあることが考えられるし、表に見るとおり年代的な特徴は特に現れてはいない。

なお、疑問形の中には「～でしょ(う)?」「～じゃない?」のような形で、形式的には疑問形であるが、相手に特に答を求めているわけではなく、強く断定することを避ける言い方がある。このような断定回避疑問形は話しことばではしばしば用いられるが、高校生の談話でも50例の疑問形のうち、23例(46%)はこの形であると判断できた。成人の場合も[H A] 5例(62.5%) [H I] 5例(41.7%) [S H] 17例(34.0%)と話者によってばらつきはあるもののこのような例は多い。

## III 命令・依頼・禁止・勧誘など

命令形やこれに類するものは、高校生の6例、成人[H I] 7例の13例のみである。しかし現れた形式をみると、かなりの違いがあることに

気づく。成人の場合、7例中4例が「待って」「許して」などの「～て」型、それに終助詞「ね」がついたもの1例、「確認してください」のように「～てください」と依頼しているものが2例という構成だが、高校生の場合、次の例のようなはっきりした命令、禁止の形が見られる。

255T ちょっと うしろを 振り向きたいけど 振り向けない。

256M ま 失礼だから それは やめておけよ。

なお、後掲(49頁)の343「言わずなよー」のような形式は相手に対して禁止の意を表明するというよりは、相手の意見に対して感想が言えないほど驚いたとか非常に面白いとかあるいはうんざりしたという気持ちを表す決まり文句として使われている間投詞的なものと言えよう。また成人に多かった「～て」型は「許して」1例のみ、「～てください」は皆無であった。

#### IV 間投詞・応答詞・あいづち・(笑)など

応答詞やあいづちの頻度は成人の17.7%に対して19.9%と、高校生のほうがやや高いが、成人3人の頻度の数値から見ても話者による差が大きいと言えそうである。小林(1994)ではすでに受け手発話として応答詞・あいづちの頻度を調べ、この雑談の参加者のうちS、Tという2人に参加者や成人の談話の参加者(インフォーマント以外を含む)に比してもあいづちが多く、2人がそれによって他者の発話を聞き理解しているという表示を行い、談話を進行していることを指摘した。

#### V 中断文(含言いさし・言いよどみ)

終止形や終助詞、その他の形式によって完結せず、完結のためには次に何らかの発話があることが予測されるにもかかわらず、ことばが中断しているものである。談話においては、これもまた一つの文の形式であるといえよう。一般的に「言いさし」「言いよどみ」などと言われるものを含むが、文字化された談話資料の中断文において、どれが「言いさし」



でどれが「言いよどみ」ということを厳密に区別する方法を持たないので、これらを含むものとして中断文を一括して考えた。高校生の場合このような中断文の頻度は成人の半数程度でかなり少ないといえる。これらが意図的に用いられる場合、一般的なのははっきりした断定を避けて、文末を濁し相手の察しに期待する婉曲話法としてであるが、高校生の場合、他者が割り込み発話したことによりそれまでの発話者が発話を中断してしまうという例が目だつ。他者の発話中にも思うがままに発話し、他者の割り込みにも寛大である、しかも遠回しな言い方などはしないという高校生の談話の特徴が現れているところであろう。

## VI その他

高校生に見られた「その他」4例はいずれも早口だったり録音状態が悪く聞き取りが不能であったものである。また成人の場合は9例すべて「おはようございます」「ありがとう」などの挨拶語である。

### 3. 終助詞「ね」「よ」「の」に見る会話管理

表に見るとおり、高校生は「よ」(40例 9.5%)「の」(28例 6.6%)「ね」(22例 5.2%)などをよく用いる。「よ」と「ね」が複合したと見られる「よね」(30例 7.1%)も多い。これらは成人の場合にも比較的よく現れているとは言えるが、最も例の多い「ね」でも4.6%ほどで他は2~3%程度と、いずれも高校生ほどには使われていない。高校生はこれらの終助詞によって、どのような心的態度を表そうとしているのだろうか。

#### 3-1 先行する解釈

ところで、これらの終助詞のうち「よ」と「ね」は時枝(1951)が「よ」は「聞き手に対して話し手の意志や判断を強く押しつける表現」、「ね」は「聞き手を同調者としての関係に置こうとする主格的立場の表現」としたのをはじめとして、おもに情報を担うのか、または対人的な態度の表現として用いられるのかという視点から比較して論じられることが多かった。メイ

ナード(1993)も「ね」を「相手の意志や気持ちをたずねる表現にも使われる」、「よ」を「相手の意志をたずねる余地がなく相手にかまわず話し手の意志を押し出すときや押し通すことを意図する」とし、「ね」を使うか「よ」を使うかは情報の相対的所有度による — すなわち話し手がより詳しい情報を持っているときは「よ」、聞き手がより詳しいときは情報自体に焦点をあてることを避け「ね」を使い、両者は相互補完関係にあるとする。メイナードはこの論に基づいて、実際に日本人20組計60分の日常会話における「よ」「ね」に後続する発話行動を分析し、「ね」の後にあいづちが多く、「よ」の後には話者交替が多いという結果を得て、「ね」「よ」ともに相手からの反応を強く要求する表現であるとともに、「ね」があいづちを要求することから相手の心的態度により焦点が置かれているとする。

メイナードのようないわゆる「情報帰属の概念」による「よ」「ね」の把握は「情報のなわ張り理論」として神尾(1990)などにも論じられているが、片桐(1995)では、情報帰属概念では説明できない「ね」 — 話し手自身の行動など話し手だけが知っていると考えられる情報に「ね」を用いる「ちょっと銀行に行ってきますね」などの存在を理由にこの論を批判し、「よ」「ね」は共同行為としての対話の中で「話し手が情報内容をどのように受容しているかに関する情報」を担うものだとする。「よ」は当該情報を話し手が自分のものとしていることを示し、「ね」は情報は得たが必ずしも受容していないことを示すという。「銀行に行ってきますよ」といえば「銀行に行く」ということは話し手に受容された確固たる判断ということになるし、「行ってきますね」ならば判断は一応しているが再考の余地もある、つまり完全に受容はしていないことを相手に示すことになるのであろう。情報が未受容であるということは聞き手の判断の介入の余地がより大きいということになるから、「ね」が対人関係の構成において情報よりは心的態度により重きをおくという点ではこの論はメイナードらの情報帰属概念による説明と矛盾しない。なお、この考え方をを用いると、高校生にきわめて顕著な文末形式「～(だ)よね」も説明がしやすい。最近「だよね」という題の流行歌など

もあるが、このことばには他者に共感の表示を求めようとする依存的ともいえる態度が感じられる。これは情報帰属概念による説明では、情報がすでに話し手に確固として帰属するからこそ「よ」を用いたのに、さらにそれ全体を曖昧なものとする「ね」をつけるのは矛盾に他ならないが、受容・未受容の概念によれば、「～(だ)よ」と情報を受容している自身の状態そのものを対者との共同行為としては受容していないと相手に示していることになり、とりもなおさず相手の心的態度をきわめて重視しているということになるわけである。

「の」については一般には「文の調子をやわらかくし、軽く断定をする」(日本語教育辞典1982)などと説明され、従来はおもに女性が使うことばともされた。平叙文では、自身の行為・経験・判断などで相手の知らないことについておもに情報中心に伝達するときに用いられる。「行くの」といえば相手がそれをどう受け入れるかに変わりのない自分の意志を表明しており、「行こうよ」「行こうね」は言えても「行こうの」とは言えない。「今日は寒いよ」「今日は寒いね」が情報の受容の状態に差はあるにしても話し手と聞き手がともに同じ場において寒さを感じられる状況にあることを示すことができるのに対し、「今日は寒いのは風邪をひいて他者の感じない寒けを感じているとか、同じ場にいない相手に電話でこちらの気候を知らせるという場合の言い方である。これらからも「の」には「ね」のような情報を相手と共有しようとしたり共感を求めたりする心的態度や「よ」が持つとされる判断を押しつける働きはほとんどなく、心的態度としてはおもに「調子をやわらかくし、断定を自分のものとしてとどめ他者に押しつけない」ということを担っていると言える。なお「の」にはもちろん疑問形(抑揚を上げ調子にする)や、命令形(「さっさとするの」「バカなことを言わないの」)のような形だが今回の調査資料には1例も現れず)もあるが、ここでは問題としない。

### 3-2 高校生の雑談における「ね」「よ」「の」

#### 3-2-1 「ね」「よね」について

資料中に出現する「ね」のうち、発話の最後にあって、その文を完結させているとみられるものは55例あり、終助詞のなかでは最も多い。ただし表2に見るとおり、「よね」の30例も含め、このうち42例までは用言や体言の言い切りの形と「ね」の間に別の助詞、助動詞などで聞き手との対人関係を構成するといわれるものを挟んでおり、「ね」だけで心的態度の表明を担っていると考えられる例は13例にすぎない。

140M    じゃあ あたしさあ あたし ひとりだったら いいのね。

／箸 使って。

241K    じゃあ 箸が 転がっても 笑うんだね。

120K    (男子生徒の弁当を見て) なんか 女の子みたいだね。

245M    (男子生徒の髪型が) 似合わないよね。

例はいずれも高校生の資料に現れたものである。140、241では単純に相手の同意を求めるのなら「いいね」「笑うね」でよいのだが、いったん自分の判断をした上で、その判断について相手の共同の受容を求めていることになる。120、245も同様である。「女の子みたいだね」「似合わないね」といえば、そのものの様態自体についても受容する(共感する)ことを求めるわけだが「よ」は「女の子みたい」「似合わない」ということに対して自分がその判断を下したという事実を示し、自分が判断をすることについて相手の同意を求めることになる。「女の子みたい」ということにたとえ同意できないとしても、他人が「女の子みたいだと判断する」ことにはだれも反対することはできないわけだから、この言い方は「ね」よりはさらに相手の共感を示す態度を求めながら、その判断内容については他者の判断に介入せず、介入をされないという距離を保つ表現になると思われる。「よね」の30例をはじめとして、「ね」で終わるものについては、このようなものがきわめて多い。

成人の資料では、他のどの終助詞よりも用言・体言の言い切り形に「ね」が付いたものの出現が多く、「よね」は「のよね」「ますよね」「ですよね」などを含め13例（3.5%）ほどあるが、それ以外の「のにね」「けどね」「なんだね」「じゃんね」のようなものはまったく見られない。これからみると成人のほうが自分の持つ情報や判断そのものに対して直接的に同意を求め、共感への心的態度を示していると言えよう。

### 3-3-2 「よ」「の」について

高校生の資料では「(だ)よ」は40例（9.5%・うち2例は「～んだよ」の形）出現し、単独で使われている終助詞として最も多い。成人の場合はどの話者も概して「よ」よりは「ね」を多く使い、全体でも「ね」の18例（4.8%）に対し「よ」は11例（2.9%）にすぎない。またメイナード（1993）の調査でも日本人20組60分の会話の文末に現れた「ね」は130例、「よ」は87例であるから「よ」を多く使うということは高校生の談話の一特徴といってもよいだろう。高校生が「よ」を用いるのはどのような場合か。例をあげてみよう。

- 010T （友人の箸箱を見て）かっこいいよ。／それー。  
101S （同上）なんか 箸箱っていう 感じがするよー。  
294M だめだよ。  
295M みんな 若者じゃないよ。／ちょっと。  
319K そんなこと あるなら こわいよー。

以上は友人の持ち物、友人自身などに何らかの評価、判断を下している例である。319についてはクラスメートの誰かがある日突然に人間が変わってしまう状況を想像して、それを怖いと言っている。これらは、「よ」のかわりに「ね」を用いても成り立つ文であるし、ほめる（010・101）けなす（294・295）共感を呼びかける（319）ということからいえば、むしろ一般的には「ね」を使うほうが自然な会話になるとも言える。この5例を含め、

「よ」が用いられているもののうち16例ほどは「ね」に置換してもほとんど不自然でなく意味が通じるものである。いっぽう「ね」が単独、もしくは「よ」以外の終助詞など対者関係を構成するといわれる語形とともに用いられた25例のうち、このような相手や第三者およびそれに属するものに対してなんらかの評価・形容などを行っているものは5例だけである。

要するに、高校生は談話の相手とともに共同で何かについて評価をするとき、相手の同意を求め、評価を共同で受容する「ね」ではなく、まず自らの評価を確定・受容した上でそれを相手に向かって投げかける「よ」を使う傾向があるわけだ。

時枝（1951）やメイナード（1993）によれば、この「よ」は「話し手の意志や判断を強く押しつける」とか「相手にかまわず話し手の意志を押し出す」のように説明されているが、先の「よね」の多用なども合わせて考えるとき、高校生がこのように「よ」を用いる傾向は「押しつけ」「押し出し」というよりはむしろ「投げかけ」とでも言うべきで、自分の判断は一応持ってそれを相手に伝える、しかしそれはあくまでも自分の判断や意見で、他者の判断を強制したり同意を求めるものではないし、自分の判断だから他者に批判や介入もされたくないという無意識の意識があるのではないかと思われる。

「の」についても成人の8例 2.1%に対し高校生では28例 6.6%と3倍ほど見られる。これは「よ」よりさらに情報中心の表現で、相手の受容については問題としないわけである。次にあげるのは、中学時代に身近にいた見かけは「つっぱり」で「怖い」生徒についての一連の会話である。

322M     でも ああゆう やつ いなかった？                                 || …同時発話

323M     うちの クラスに 四人ぐらい いたよ。

324T     いなかった。

325S     || ああ うちにも いたよ。 / ああゆう やつ。

326M   || いるよね。

- 327K || いるよね。
- 3280 || いるよね。
- 329M だってさー ざらだよね。
- 310M あんなの うちの 学校 ざらだったよ。  
(他の話題が入る)
- 342K って ゆうか 同じ 学校には いないけどー 知り合いには いた。
- 343M 言わすなよー。 / もう。  
(他の話題が入る)
- 349K って ゆうか うち もー すごい 小学校のころから 仲よかつたから。
- 3500 でもねー すごい やさしいの。
- 351T そう。
- 3520 しゃべると おもしろいの。
- 353K || そう やさしいんだよね。
- 354K ああいう 人って すごい やさしいの。 / それ。
- 3550 そば 寄ってみると おもしろいの。
- 356M どれ えっ ああいう 人って なんかさ 見かけは こわいけど 喋ると やさしい。
- 357T || いい 人なんだよー。
- 3580 || おもしろいんだよね。
- 359K 女の子に 非常に やさしいんだよね。
- 3600 うん。

事実を伝えるだけでなく、評価や意見の多く入った会話だが、文末終助詞は、「よね」「の」がほとんどである。たとえば 350 であるが、K と O は別の地域の出身なので、O が「やさしい」と言っているのは、K がいうのとはまったく違う人物に対する評価ということになる。一般的な成人の会話であれば、そのような人物一般への評価として「やさしいよ」「やさしいよね」のよう

な言い方になりそうである。また350 以後「やさしい」「おもしろい」という評価の繰り返しになるが、これなども一般的な人物評価としてでなく、各人が知っていて他者は知らない固有の人物に対するそれぞれの経験的評価をしているのであることが「の」の多用から伺われる。357 ではTが「いい人なんだよー」というが、Tの場合 324で同じ中学に「つっぱり」はいなかったというのであるから、つきあいも多分ないはずで、ここでは論理的には「いい人なんだね」でなければならないだろう。「いい人なんだよ」というのは他者に共感して持った自分の判断の表示ということになるだろうか。

「よ」や「の」の使用のようすから全般的に、自分のことを語りたい、しかし他人に自分の判断を押しついたり、他人の判断には踏み込まないという傾向を読み取ることができるように思う。

#### 4. まとめ

高校生の終助詞の使用傾向などに見られる、対人関係構成のしかたは、いわゆる成人の場合とかなり違うのではないかと考えられる。話題の展開もそうであったように、高校生は自分の判断や意見を躊躇することなく表明しようとする。しかし、それは相手の同意を求めて、共感しあい、あるいは相手の意見に対する自分の考えを表明し、互いの持つ意見を深めていくというような共同作業としての談話ではなく、互いに自分の意見は表明するが、その意見に対して相手に特に反対の意志表示をするなどの介入をさせながら、また他者の意見に自らも介入しようとはしないというものである。

とはいえ、これは相手を見捨てて相手の話を聞かず、相手の反応を気にしないということではない。高校生のおしゃべりには心的態度を表し相手との対人関係を構成する文末形式は成人以上によく出現している。相手の意見に不用意に反対したり、互いに不要な刺激をしあっていやな思いをしなくてすむように、互いに共感の雰囲気を表しつつ、しかし介入はしないという神経を使って終助詞選びが行われていると見るべきだろう。参加者はそれぞれが散発的に興味のおもむくままに話題を提起し、提起された話題も必ずしも論



理的な一つの方向に展開していくのではない「おしゃべり」であればこそ、このようないわば話法はストラテジーとして必要とされているともいえよう。

これをどう評価するかということ、またこのような傾向は高校生という年代に過渡的なもので、将来的にはより成熟した会話の技術を彼らも身につけていくのか、それともこの世代においては、このような会話管理を一生続けていくのかについては意見の分かれるところであろう。筆者としては、高校生が会議などの場では自己主張と他者への介入についてまったく違った様相を示す — むしろ、おとな顔負けの自己主張や歯に衣着せぬ他者批判なども辞さない面があるので、高校生の会話技術としては、これらを総合的に見ていく必要があると考えるし、また成熟による場への対応の変化というものも当然ありうると考え、そのあたりの究明を今後の課題としたい。

#### 【参考・引用文献】

- 小林美恵子（1994）「事例研究・女子高校生の雑談」『ことば』15号 現代日本語研究会
- 現代日本語研究会（1994）『職場における女性の話しことば』
- メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版
- 日本語教育学会編（1982）『日本語教育辞典』大修館書店
- 時枝 誠記（1951）「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』20.9.1-10
- 神尾 昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 片桐 恭弘（1995）「終助詞による対話調整」『月刊言語』24-11 大修館書店